

日本女子美術会誌

複刊【第7号】

1961年



《目次》

役員改選期に当りて…………… 5
 女医というものの立場…………… 6
 故吉岡会長の三年忌…………… 8
 ・成尋阿闍梨母集・
 母というもの……………10
 老女考……………15
 真砂路……………19
 ナポリにて……………22
 偶感……………24
 日本女医史について……………26
 総会予告と編集後記……………27

役員改選期に当りて

会長 佐藤 や い

月日の経つは早いもので吉岡会長御逝去後早くも今年には三周年を迎える事になりました。その間次期会長選挙まで
のつなぎという事で、不肖私が会長の御役を引き受けたわけであります。会員諸姉の絶大なる御協力により今日まで
大禍なく過ぎて参りました事は感謝の他ありません。

殊に国際的な日本女医会を広く紹介されるに至つた事は之編へにその都度莫大なる私事を犠牲にされて参加下さい
ました竜副会長を始め多数の有力なる会員諸姉の御尽力の賜によることと感謝している次第であります。私にかかる
場合に本会としても将来有形無形の力のある日本女医会として今後育てあげるよう考慮すべく責任を痛感する次第
であります。

我々は日本の女医として如何に優秀なる抱負を有するも之を如実に表現出来、之が実りに移されなくては眞価は認
められない事と思ひます。各個人／＼が女医として医学に対する専門的功究はありますが、本会としても何
事かの形に於いて御後援出来得る様名実共に有力なる団体にまで築きあげたいものであります。

昨年は国際的にも予想以上の成果を挙げ一方又国内的には日本女医会創立以来始めて関西に於て総会が開催されま

した。地元会員の御力添へにより一同大いに活気に満ちた年でありました。今年度は
恰も秋の総会は会長始め各役員改選期に当りますので、今後の日本女医会の有り方
及び発展の爲め時代に適応した会長及役員を我々の同僚より選出し、一致団結し、女
医としての特殊性を發揮し益々社会に貢献致し度いと希うのであります。

会員諸姉の絶大なる御支援を謝し、今後の発展を御祈り致します。

(昭三六・五・一〇、記)



女医 というものの立場

大村ひさゑ

かつて『日本女医会』が再発足しようという話がちあがつたとき、極めて一部の女医からは批判的な発言があつた。その理由は『日本医師会』という立派な団体があるのに、そのなかでことさら女医会というようなセクシヨナリズムは賛成できない、というのであつた。

しかし、ともかくも日本女医会の再発足は絶対多数で支持された。そして今日まで、可成り強い団結力をみせて、予想以上の意義があつたと私は思っている。けれども、日本女医会の着

実な、積極的な活動と、したがつてその社会に対する震幅を充分にしているが、いな、知つていればこそ、女医に対する非難が跡をたたない。たとえば今度の社会保険問題に対する日本医師会の統一行動に対して、ある地区の一人の女医がたまたま協力しなかつたという理由で（その直偽は知るよしもないが）女医は頼むに足らない、という陰言があつた。あるいは、女医に医師会の委員を委嘱して

も責任感をもたない、というもの、こう云つた女医の責任回避の消極的な態度は、女医の大多数が、医業即生活、というギリギリの生活ではなくて、親や夫のもとでの、いわば有閑マダム的、ないし、お嬢様芸を出てないからだ、というようなとんでもない誹さえきかれる有様である。まことに返す言葉がない。このような、ためにする非難に対しては弁解や釈明のかぎりではないが、いまの社会保険問題に対してだけは女医が無関心だとか非協力だとかいう非難は受けてはならないし、またこの非難こそ的是はづれである。

私たちは、自らを「日本医師会員」であるという誇りと自信をもつて、日本医師会の全体的活動に対して献身的に寄与しているという確信をもっている。しかし、実は、女医のこのようないわば「同類意識」が、男の医師には、かえつて、自分の坐る席を奪われてしまうようないやあな感じにさせるのかも知れない。

だから、男の医師の本当のハラは、日本医師会の中で、女医には委員なんなんの、責任ある地位は与えないで、発言力もないし、いわんや執行力もない、陽の当たらない場所に置いておく方がいい、という考えかも知れない。医師八万人のうち一人の女医であるとすれば、この数字は、医師にとつて、単に量的観念でいられない。足もとを

揺り動かされるような不安とぶ気味さをどうすることもできなからうとおもうのである。

それはそれとして、私たち女医には、男の医師にくらべて、可成りなハンデキヤップがあることも自覚しなくてはならない。それは医師としての仕事のほかに、私たちはあるいは主婦であり、妻であり、母である、というように、医学なり、医業なりにだけ専念することが出来ない場合が多々ある。そのために、いわゆる日進月歩の医学の文献を読むひまも自然に少なくなるし、したがつて見聞をひろめるという機会も失われがちにならざるをえない。

だから「女医は世事にうとい」とか「女らしくない」とかいう声は、たしかであり、謙虚にうけなければならぬ。しかし私達の仕事の対象は、生きた貴い人間の生命のみである。

私たちは、その人間の生命をまもるために内外の医学技術に対する知識を貧欲に追求しなければならぬし、身近かな保険問題とも取組まねばならないのである。

私たち女医が、すべての事に対して情熱的に、良心的にそして益々意欲的になつて、生長すればするほど、男の医師からの非難や非謗はさかんになるかも知れない。が私たちはそういうことにあまり神経質になつたり、まともに批判の矢面に立つて、あれこれと弁明する必要もない。男の

医師と比較して、私たちが置かれている、宿命的な社会的の「家庭的」といふべきかも知れない「窠み」の立場を知つた上で私たちは、できる限りの精進と切磋琢磨をおこたつてはならない。

たとえば繰返し述べたように今や政治問題化されている医界のこの激しい動きの実状を識るためには最小限度医師会雑誌と日医特報は必需熟読せねばならぬものである。無味乾燥なこういふものを読むより、週刊誌の方がおもしろいにちがいない。

誰かが云つたように「のりものの中では、乗車券をもっている数と同じ週刊誌をもっている」そうであるから。それではこまるのである。このような医師会への消極的な態度と、実状への無関心が、「女医は非協力だ」というような発言になるのである。このことは必ずしも女医のみに限つたことではないが、しかし私たちは、謙虚に反省しなくてはならない。大体に女性は男性に比較すると、政治意識や社会的意識が低いことは事実である。ノミナルな男女平等でありたくはないし、またあつてはならない、

やはり私達はもつともつと問題意識への強く深い勉強がなされなくてはならないとおもうのである。



故吉岡会長の

三年忌にあたりて

大 貫 セ ッ

故吉岡彌生先生は特別なつかしい。今一度先生とよび、あのこやかな笑顔に接したいと夢にみたこともある。こうしたことは私だけではないだろうと思う。

女医界四月号に吉岡会長の三年忌のことが認めてあつたので思出の一言認めて先生をしのびたいと思う。

明治四十三年五月、医師免許証を得たばかりで先輩山尾姉、杉田姉、それから町田姉（現蛙田）、内田（現大貫）四名は、東大小児科教室から分離したばかりの婦人共立育児会病院（当時麴町区にあり）に研究生として入れてもらった。其時に吉岡彌生先生はこの病院を来観せられたのである。其時が先生との初対面であつた。今より四十九年前である。

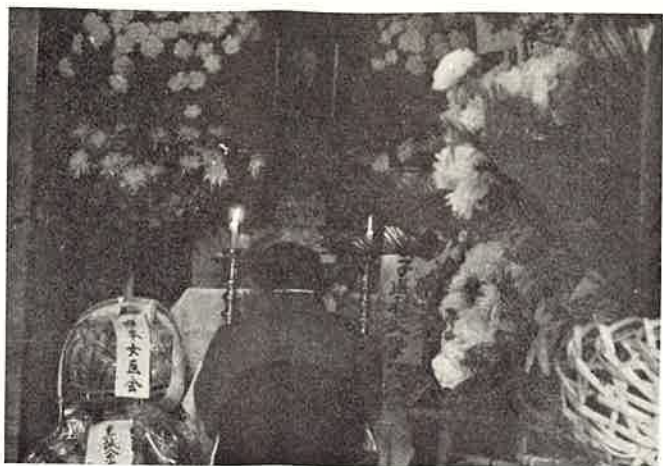
お若い立派な先生であつた。私共は吉岡先生の真似をす

れば女医らしくなるだろうと思ひあこがれていた。

先生は地味な日本着物白襟袴黒紋付羽織であつた。それが実によくお似合で一段と美しいと思つた。吾々は先生のスタイルをそっくりと真似をした。大学小児科に見学にゆくにも同じスタイルであつた。町田姉は東京女医学校出身だから何でも相談しながら共に研究していた。弘田博士の診療所にもお手伝かたがた通つて育児会病院とかけもちで研究させてもらった。当時は女医が病院に勤務する場所はなかつたのである。

さて吉岡彌生先生に何でも相談するようになったのはその頃からであるが、町田姉を経由、何でも勤務先のことなど吉岡先生のお世話になつたものである。神戸の坂本産婦人科病院も先生は私が医員として勤務するようにお世話下さつた。そして女医は産婦人科も研究しておかないと損であると特に申された。また其後自分で開業する時いろいろ相談をした。英領馬來半島スレンバン市、すなわち海外行の時も先生の賛成を得た。

このように常に精神的御指導を仰ぎながら勇氣百倍事にあつたものである。だから先生は恩人であり指導教授である。先生御発病前年お車をまげさせられ私方へお立寄り下さつたこともあるが短時間で何のおもてなしも出来ず今以つて残念であつたと思つている。



三 年 忌 会 場

ときどき至誠会々議室で日本女医会の役員会がある。其時に美しい先生の大笑を眺める時はすべてが感慨無量である。私はお写真とひそかにお話することが出来る。それだからあの会議室はすきである。

風 光 る

三 浦 外 志

朝日さす大海原や風光る

ボートこぐ水のしぶきや風光る

ランドセル走る野道や風光る

シイツ千す病舎の庭や風光る

春泥をランドセル迄はね上げて

三浦外志氏は病を得て目下熱海の病院へ入院中であるが、右はその病床にての作である。

— 母というもの —

島 津 草 子

母の愛の文学として成尋阿闍梨母集は、日本文学史上に於てすぐれた位置を占めている。平安時代後期の成尋阿闍梨が六十余りになつてから道のために宋国に渡る事になる。成尋阿闍梨を送る齡八十を過ぎた母の切なる愛情を記したのがこの集である。我が子の仏道修業の完成を念じ望みつつも、自分から分身して行くのに堪えられぬ苦しみ、出来る事なら手離したくない母の愛情が満ちて、全く集は深刻な母性愛の結晶であり、哀切極まりない母性の血涙で慈母の愛を滲々と味わせてくれる。

「このさんたちを、てゝもなくなりてもたるに、人々まいらせも、宮と申すも之さらぬすちにて、我しらんなど、さまゝの給ひしかと、法師になしてんと思ひなりにしをおほゆる。」

とあり、若くして夫に死別し忘れ形見の二児を掌中の玉と育くみ、親族の人達の言葉を拒けて子供を法師にしようと決心し、二児共幼少より仏門に従い、兄は律師、弟は成尋阿闍梨となつて世に重んぜられ、長い間の母の労苦は報いられた。

「四月にみかとうせさせ給ひて、七月のついたちの日、いはくらにいりぬ、そこにいりて念仏もせよかしとあれはよろこひていりて、ちかきところにてみかよはしと思さまにてはへる。」

とあり、治歴四年四月十九日に後冷泉帝崩御、その後七月一日に成尋阿闍梨は岩倉の大雪

寺に入り、母を呼び寄せて毎日親しく語り合うようになった。作者にとつては、これこそ思うさまなる喜びなのであつた。然しその喜びは間もなく破れたのである。

岩倉に於ける楽しい生活は、治歴四年と延久元年の二年ばかり続いたのであるが、成尋阿闍梨はかねてから渡宋の志が成就するように念願して不眠の行を続けていた。この行を果した上で宋国の五台山の文殊菩薩の御跡を尋ねる可く入宋を考へて居たので、予め入宋の猛志を母に告げたのである。作者は成尋にこうした志のある事をおかねがね氣付いて居たであろうが、今明らかにそれを告げられて非常な衝動を感じた。それは後三条帝の延久元年の事であつた。越えて延久四年に成尋は宋に渡つた。この時母は八十五才の高齡であつた。集はこの時の悲しい我子を思う母の極致な心を繰り返し書き返し書き連ね、その帰朝を待ちこがれてやまない切々とした真情を綴つている。

作者は成尋の希望を防げまいと思つて、泣いて止める事もせずに出立させてしまつたがさて別れてみると日に添へて悔しく、なぜあの時に手をつかまいて引止めて置かなかつたのであろうかと残念で涙は止めどもなく流れる。幼な子が母を慕うてその手に縫りつき、泣きわめくようにして無理に引き止めて置けばよかつたと後悔せられるのである。母性が子を思う情はこれほど切実なものであるが、之に対し成尋が道を求める意欲は又自づから異なるのである。成尋は渡宋前に暫く備中の新山の靈場で百日の修業をする事になり、母の許へ嘔乞に来た。求道に心を引かれていた成尋のその時の態度は母の目には不満足にみえた。

「さらはけふたにとくおはせかしとまつにからふしておはしたり。とりなとの人をみてとひたちぬけしきはしたまへるに、みるにつけても、いかなりけるちきりにかと、めもかきくるゝやうに、なみたのみそつきせすしほるゝ。」

と記している。母はこの時宋まで具して行く事は出来ぬにしても、せめて新山まで行きた

いと頼んだのであるが、成尋は「修業者おやなりとも、いかゞくしきこえんとする。」と云つてその儘出かけたのである。然し成尋が母に対する恩愛の情がないのではない。成尋が渡宋を請うて朝廷に奉つた状の中には、

『母老兮在_レ堂。晨昏之礼何忘。然而先世之因。欲_レ罷不_レ能。今世之望。又思_ニ何事。』と記して居る。誠に求道念の止み難きものがあつたのである。傑僧成尋阿闍梨の熾烈な求道心がその母に深刻な悲痛を生ぜしめ、それがこの集執筆の動機となつたものである。

「たかきもいやしきも、は_レのこをおもふこ_レろさしは、ち_レにはことなるものなり。はらのうちにて、みのくるしうおきふしもやすうせねと、我身よくあらんとおほえす、これを見るめよりはしめて、人よりよくてあれかしと思ひねんして、うまるゝおりのかくるしさもゝのやおほゆる。むまれいてたるをみるより人のこれをあはれひおもはずは、ものになるへきひとのさまやはしたる。その中にもはかなかりけるにか、このあさりの、いみしうかなしかりしかは、わかこ_レろのくるしきもしらす、これをまつ人もわれもあつかふほとに、人にいよかすれはなき、われいたけはなきやみたまふを、しはしもなかせしとおほえつゝ心みれと、猫ほかにてはなく。わかもとにてはなかず。おましなとにふすれはななくに、よもうしるめたくて、ひさにふせて、たかつきをとうたいにして、ひさのまへにともして、さうしに女中をあてし、も_レかまでそのめにはあつけすはへりし、おきかへりのほとに、そのこ_レろさしいま_レておこたらす」

切実な母性愛の表現である。我子を愛する心は父に於ても切なるものではあるが、然し我子と最も近く居て我子の愛情の實際に当る中心者はどうしても私であり、我子の可愛さに於ても我子の信頼に触れる心に於ても恐らく父より一層微妙さを持つて居るのは母であろう。母と子の関係は非常に本質的なものがある。母と子とは元々一つであつた。それ故に母に取つては子供は最初から自分の肉体の一部として成長して来ている。決して別な存

在ではない。此の点父の子に対する関係とは本質的に違ふというやうな子に対する父の愛と母の愛の異なるを説き、生れ出る我子が人よりよからむ事を願い、胎児が胎内にいる時から、特に母の品性を善良にして胎児の環境の善かれかしと思ひ、妊娠中精神的の節制をして端正な嗜かを続け、次で出産の事に及んでいる如きは、古代の日本文学中唯一の文献と云われる。新しい生命と輝かしい希望とをもつて生まれ出た成尋が春の若芽のように育つて行く事を母は願つた。我子を見守つた母の心は、我子可愛さから起つて居る。理窟でもなくお役目でもなく我子可愛さに只もう已むに已まれぬ自然の心から起つた。こんな可愛い我子をそれが人手に任せられようか。他の物なら人にも任せるだろう。自分で抱いて自分で育てずにはいられなかつた。心から離せないのが我子である。心から離せないばかりではなく何から何まで我子の一切の事を我が手でしてやらすにはいられない。手離せないというよりも手離しては母の心が耐えられない。この様に可愛い我子、我子の為には苦勞も苦勞ではなく、面倒でも面倒ではない。どんな苦勞も面倒も我子の為には何でもない事で、我子可愛さにそうしてしまうのである。取立てた心持ではなく、あたりまえに何とはなしに籠つて居る可愛さである。愛育の心はこうした母の心の自然から始まり、我子に対してはしてやらすには居られぬ心だつたのである。是は母と子の切つても切り離す事の出来ない親しいつながりを意味するもので、こう云う所に母の子に対する愛情は源を持つのであるから、それは自然であると共に深く切なるものであつた。その性質から云つても何物を以てしても変える事の出来ない唯一絶対にして微妙なものである。子供はその母奥にとつて可愛という所を通り越して悲しいのである。即ち一筋の絃の上に連つて生命の内から響きを伝えてゐるとも云わるべき境にあるのである。全く魂をもつて子供を愛するのである。この場合愛の対象は子供の生命そのものである。母は自分の全部を子供の生命に捧げているのであつて、この純粹なる愛、生命に向つて只単に奉仕する母性愛は我

子に対する時その熱意と力が湧いてくるのであろう。殊にその生まれた成尋阿闍梨が虚弱であつたので、生後百日の間襖に背を当てて日夜母でなければ出来ぬ慈愛を注ぎ続けて愛育した叙述の文は、この集が他の何れの女流日記にもない母としての慈愛と其特長とを示しているのである。

「いまは、もしたちよりおはしたりとも、それまでよにいきてはへらしと、けふにてもうせぬへくおほえはへる也。

なけきわひたえんいのちはくちをしく つゆいひおかんことのはもなし

とおもふほとにせかなく。おとろくしきこえ、ひきかへ道心おこしたる、くつく法師となくもむなしきからこそは、すえにはとゞめすらめ、それにもおとりて、このみにはかけたにもみえず、あはれにつきせぬなみたこほれおつる」

とあり、もし成尋が帰国するにしても、自分はそれまで生きている事は出来まいなど思い萎れている折から蟬が鳴く。元気な声に似合わず「法師々々」と鳴くは蟬も道心を起しているのである。それでも蟬はかたみのぬけがらを梢に残して去るものを我は我子の影さにも見ることが出来ないと思えば、流石に物狂はしく云い様もなく涙が頻りに流れるのである。豊かな聯想と複雑な悲しい母の心をよくも手短に書きつくしたしたのである。焼野の雉子夜の鶴の例もさることながら、かくまでに母性愛を高調して記したものは、他に類を見ないのである。思うに作者は自分の心中を成尋が帰朝したらば見せたい心と、八十の母が六十の子を慕うという世に稀なる事実に於て母の愛は母性の一生を貫く強靱なものであると云う母の心を知らせている。さるにても八十五才の老母の手記がこれほどゆとりをもつて力強く鮮やかに、しかも情趣豊かに書き残されたと云う事は、珍らしい事であると共に老いて後我子を万里の波濤のあなたに送ると云うその事も特殊であると云わなければならぬ成尋阿闍梨母集は世に稀なる高令の母の作である点に於ても尊重すべきものであろう。

老女考

米 山 千 代 子

だいぶ前のこと、テレビで大矢市次郎主演の『放れ猪』というのをみた。戦後家のまだ若い嫁が



あえぎながら「老いぼれたイノシシは子供や仲間から捨てられて放れ猪になるのに、わたしはいつまで、稼いでこの親父さんを見てゆかねばならぬだろう」と訴えるセリフがひどく心に残った。み

すてられるのは猪だけではなく、猿もそうだし、あの巨大な象でも年をとると娘のムコ象が力づくで追い出し、帰ることを許さぬという。

医学の進歩は人間の寿命を伸しはじめた。産児制限はうまくなり、赤ん坊より老人の方が多くなり、長命につきま

のの老人の精神病が急速に増えてきた。アメリカでも、イギリスでも、入院患者の約三分の一が、この老人の精神病といわれる。

日本ではいまのところ老人性精神病に対する考えがまだ甘く、敬老思想が残っていて、入院もさせきれず、入院費も払いきれず、家庭におき、としよりの無理難題に手をやいている家庭が少くない。

昨年の秋だった。▲繁昌する精神病院というテーマでRKB毎日の五元ラジオ放送に出たときのこと、わたしはこの老人性精神病をとりあげ、この病人が家族にあたえる苦悩のなみなみでないことを述べ、このような老人だけを収容する施設があつてもよいことを強調した。

すると遠近各地の聴取者から、あいついで手紙が来た。わたしはいまさらのように、この病人のために家庭を破壊

されている人の多いのを知られた。さらに、またわたしを、いつそう考えこませたのは、この手紙の中の病人は、

一、すべて老女であること

一、若いときからドライで無信仰であつた

一、働きずくめの一生で遊ぶことを知らなかつた

これを見ると老後は、生活保障だけではすまされぬ、肉体的老衰だけでは説明のつかない人間の、いえ、女の悲劇があるのではないだろうか。

こうした型の老人精神病をわかりやすく表現すると、世にいう「鬼ババ」のそれである。これがしだいに悪化して末期になると芝居でみる「安達ヶ原」の鬼どころではない。最近では強力な鎮静安定剤ができて、昔にくらべると非常によくなつとはいふものの、中にはどの薬にも抵抗して医者も看護人も手をやくことがある。食欲は異常に亢進、欲張りで、わがままで、感情は荒廃し、その行動は野獸そのまま、正視するにしのびないものがある。これに出遇うたびに、わたくしは医者としてではなく、同性としてかぎりない憂愁におそわれる。

というのが、この老女たちは、壮年や初老期を通じて智力も意力も拔群で、献身的に、そのすべてを家族に、世間に奉仕して来た。私情をきびしい自己修養でおさえにおさえ、娯楽を罪悪視して、克己勉勵してきた優秀な主婦であ

つた。反対に依存的で夫に甘え、子によりかかつた、いわゆる悪妻愚型はこのようなにならないのである。

ところで「放れ猪」も、お猿も、娘ムコに追い出される象さんも、オスだというのに、わたしの診療所にもちこまれる、もてあましもの老人の大部分がメスだというのはどうしたことであろう。

もともと、この精神病のなりたちは、複雑多岐なものとされ、研究途上にあるものを、わたしが手軽に結論づけるのは独断にすぎるけれど、女は男より長命である。七十以上の老人では約四分の一、九十才以上ではその八割が精神異常になるといわれるのだから、「鬼婆」の出現率が多いのはあたりまえのことであるともえよう。が、わたしがいいたいのは、この鬼婆型の精神病者に共通する特異の生活史である。これらの人たちは前述のように良妻賢母型、男まさりの女丈夫型で、一家を支配し、家を再建したというような激しい功撃的な気性の人で、娯楽も、恋愛も罪悪視し、仕事即人生だつた。また、頑健で病氣もせず、失意の経験の少ない成功者である。迷いの少ない自己の信念に生きぬいた人であつた。他から信頼され、尊敬されても愛されることの少ない女であつたことに心をとめたい。

こうしたタイプの女は昔は珍らしかつたものだけれど、いまはそうではない。女は男と同権を主張し、家庭から職

場に進出し、意欲的に男性と肩を並べようとしている。有能な婦人ほどオスでもメスでもない一つのタイプを具えてきた。このタイプこそ、いま精神病者となつている老女の

歩いた道、生活のそれと一脈あい通じるものがありはしないだろうか……。しかも、これからの社会は家族主義から個人の時代に入り、扶養の責任も分散されて、こうした女の君臨する家がなくなつてゆこうとしている。これから二、三十年もすると鬼婆が巷にあふれるようになるのではないだろうか……。

大宅壮一さんがイスラエルの旅の話で「五、六十才の男には大芸術家、大政治家、大宗教育家……これらのどれにも向きそうなの、とにかく、偉大」という言葉を象徴するような堂々として、深味のありそうな風格を具えたのがいくらでもいるのに、鬼婆とくしては西洋のオトギ話の挿絵に出てくる鬼婆そっくりなのがある……と。

また、ある特派員のパリ通信にも「容色の国パリのお婆さんは稀に見るにくしげな形相」と痛罵しているのを見かけたが、よそごとではなさそうな気がする。

そんなら、わたしたち、チャツカリ型の女が老境に入つて、放れ猪にならぬようにするためにはどうすればよいのであろう。いろいろのことがいわれているけれど、いちばん取りあげたいのが「あそび」である。若いころから仕事

の量と同じ量の遊びを、日常生活の中にゆたかに盛りこむことである。

しかし、ある意味で、あそびは仕事よりむずかしい。そのうえに、あそびはピンからキリまであつて、最高の完全なあそびは芸術といわれるほど複雑な内容をもっている。

わたしたち人間の生活が、各人みなちがうように、このとりあげかたも、それぞれ変つた角度から常に新しい工夫がなされていねばならないのに、文化の機械化をそのままに、人々があそびの方法まで規格化し、みずからの個性を無くそうとしている。いま世をあげて謳歌するレジャーなどというものが、その適例で、こうした日常生活の変化を追うあそびは、一時の精神緊張を解放するに役立つけれど最後的にはわたしたちを救つてはくれない。

わたしたちはそうした初歩的なあそびの段階から、年をとるにつれて、もつと複雑な、高度なものに秩序を立てて前進することが必要になつてくる。生活というものは、あらゆる芸術の中でも最大の芸術で、わたしたちも熟練すれば生活の上で芸術家になることができるといわれる。天性の楽道家も幸せな人間像の一つだけれど、知性の修練と忍耐によつて、みがきぬかれた性格はより尊く、それ自体が一つの芸術品といえよう。もとより凡俗のわたしたちが一躍それを身につけることはできないことだけれど、人間の

日常生活そのものを安定させ、個性のある独自のものに創りあげることこそ、わたしたちの晩手を、一生の終りの時期を平和に、より幸せにする唯一最上のものであることをつねに深く銘記したい。そして、そのための生活技術を、なるべく早く、人生の壮りのころから、身につけるようにところがたいものである。

わたしはこうした反省を「わが心にあそぶ」と呼んで、神経症の患者さんと再起のための方法をつねに工夫し合う。しかし、そのために誰よりも救われ、恩恵をうけるのは、反つて医者わたしのような気がする。そんなら、そのわたしに、どのような老残が待っているというのだろうか……。そんなことはどうでもよい。いまのわたしには計ることのできない未知の結果よりも、いまから進もうとする過程……プロセス……を大切なものと思う。

最後に、これはわたしの夢の構想のひとつだけれど、

「わたしは、放れ猪になつた老女を迎えるために家がほしい。先づ広い庭がほしい。こうした老人の多くは不眠に悩み、夜中になると室内に閉じこめられることに不安をおぼえ戸外に出たがる。老女がハダシでとび出しても、転んでもケガをしないように芝をうえた庭がほしい。きげんのない日には土いじりをさせるための島もほしい。不機嫌の赤ん坊を戸外につれ出すと泣き止むように、星の夜空や、

緑の大地は狂女の心に、ふしぎな安らぎをあたえる。開放療法は薬物にもまさる最良のものなのだから……。

また、いつも清潔なネマキヤオシメのために、大きな洗濯機と乾燥室もほしい。女性の宿命の一つといえる肉体の構造は、ともすると異臭を発散させる。こうしたことで、それを守つてやりたい……。等々。」

こんな施設の老人ホームはつくれないものだろうか。わたしたち女医の手で。

●お願い

今年度末名簿発行の予定ですの
で、住所、電話、学位等に変更
のある場合には至急日本女医会
本部宛御連絡下さい。

真砂路



青 樹

島津草子女史のこと

医博島津草子女史は、二十年來国文学の研究をされてい
て、さきに「成尋阿闍梨母集天台五台山記の研究」とい
著書をされた、B五版、六五一頁の大著である。これが近
きうちに学位を授与されることになつてゐるという。この
研究についてのあらましを女史にお願いしてこの号に執筆
して貰つたが、氏はこの母子の文学を研究され、世の中の
母と子のことを考えておられる、これを診療の傍らになし
とげられたことは到抵われわれの想像さえも出来ないわが
である。この大著をわかりやすく小冊子として近々お出し
になることを計画しておられる。わたしはその原稿を幸に
拝見することが出来たのであるが、その中に、
「子供というものは愛して育てなくてはならない」
愛して育てられた子と、そうでない子はすぐわかる、子供

のすなおさがそれを証明してくる、と書かれている。

「子供は必ず親が育てなくてはならない」

「子供は母乳で育てなくてはならない」

「子供はその泣き方によつて健康、不健康をみわけること
が出来ると」

この点まことに丁寧に記されている。

「子供を愛するということは、母親が子供を愛せずには
おられないの感情の流れであつて、これがいわゆる母性愛
である」

私ははじめて母性愛というものの定義を教えられた気持
になつた。

「子供の発育日記は記さなくてはならない」

これをなし遂げることは、いふべくして行われぬこと
で、むづかしいけれど、なし遂げた人たちの子供はよく育
つている。

「権勢も財宝もすべては寿命あつてのことで、寿命こそは、まことに大切にすべきである」

又遺伝の重大意義もくわしくのべてある。

母性の健康状態というものは「民族の健康につながる」と大きくのべてある。

右の如く千年の昔も今もかわらない母と子のつながり、母性愛の尊さ、完全なる育児の方法等について、学理的に歴史的に、ていねいに記されてある。

この書が刊行されるならば、わたくし達は勿論、世の多くの母と子の読むべきもので、広く江湖におすすめしたいと思う。

足音

雨の夜である、おそくなつての往診、傘をさして、合羽を着て、下駄をはいての往診である。そのかえり路、坂を登つて道をまがつて、ペープメントの上を歩いてみると、自分の足音がきこえる、何となく元気がないたよりない足音である。

わたくしは自分で自分の足音を意識的にきくのははじめてである。

これ迄何十年來足音をたてて歩いてきたのに、自分の足音をきいたことがない。だれでもそうであろうか、人はき

いているのであろうか、何となく変な気がする。しかも元気がないたよりなさそうな足音である、これはいけないと思つて、これまでいつも歩いている足どりに歩いてみる、中々元気にみちて勇氣もある足音である。

ここでわたしは考える。

これはどうしたことであらうか、わたしもいよいよ老境に入つたのであろうか。齢古稀ともなればまさに老境である。老境に入つて老の足音を出したとて不思議はあるまい、気にかけてぬことにしよう。

でもこれまでこんな足音をきいたことがないのである。しかしまた考える、これまで自分の足音をきいたことがないのだから、その間どれほどの足音の変化を来したのか低下を見るのか比較は出来ないのである。

又この足音にも条件というものが手伝つていと思う。雨の降る夜、晩い夜、昼間遠方迄外出をしている等、この三条件が揃つていから足音に元気がないということも出来る。

こうして自分の足音を自分できいて考えてみるのも興味がある。

みどりのおばさん

近ごろ交通の頻繁につれて交通事故が続出し、中にも可

愛い学童がその奇禍に逢うことが多くなつた。それでPTAの発案であつたかとも思うけれど、学校前とか、その近所とかに「みどりのおばさん」というのが立つて、学童のための交通整理をするようになった。

みどりの制服と、黄色の帽子と、黄色の小旗で、朝の登校時、午後の帰校時に、その手さばきも鮮やかに整理をしている様まことにみごとである。又その颯爽とした有様スपोर्टイにさえみえる。傍によつてみると、一々言葉を交えての整理である。

「さあ一年生さん通つて通つて」

「気をつけておかえりなさいよ」

「一年生さんさようなら」

と低学年に向つては一入懇切丁寧である。又子供達も、といつてよるこんで通る。すこし上学年の子供達もみんな

「おばさんさようなら」を忘れないで通つていく。

その有様のなごやかなこと、うつくしいこと、私はしばしば歩をとめてそれをながめていた。

こうして「みどりのおばさん」に交通整理をうけて通つた子供達が成人した後、小学校を思い出す毎に、

「さあ気をつけておかえりなさいよ」

といわれた「おばさん」のことを永久に思い出すである

う、なつかしい思出になるのであろう。

緑と黄という配色がまたよい、新鮮である。印象的である。

この「おばさん」も雨の日、雪の日、風の日、並大抵の苦勞ではないと思ふけれど、あの可愛い幾員の子供達の一一人一人から「おばさんさようなら」といわれてみると苦勞もとび去るのではあるまいか、ともあれ巷に「みどりのおばさん」の姿をみることは心の和む思いがする。



ナポリにて

仁 瓶 礼 子 記

今日もよい天気である。朝九時三十分バスで出発して、まづポンペイ廃墟の見物にゆく。ガイドの背の高い小父さんは、大変に愛嬌のある親切そうな人で時々冗談を飛ばし笑わせている。

バスは旦々たる有料道路をしばらく走り途中カメオの製作所に立ち寄る。こゝもベニスのガラス工場と同じで全くの手工業で数人の若者が器用な手付きで彫っていた。隣りの部屋にはネックレス、電気スタンドなどの製品が陳列してあつて客の需めに応じている。

車は再び走りつゞけてポンペイの町につく。ポンペイの廃墟はベスピアスの山を左手に眺め現在の町の小高い丘の上にある。右手はソレント、カプリの島がナポリ湾上に横湖としてかすんで見える。ベスピアスの山は丁度九州の桜島に似た形で父と子の二つの山からなつていゝ。

今は樹木もあつて平凡な山の姿をしていて過去のさうした大爆発による惨事も知らぬ気に平和な姿で立っている。頂上は標高一八八六米とかで登山電車も通っているらしい。この廃墟は一七四八年に偶然に発見されてそれから二

百年かゝつて約三分の二が掘り出されて今もなお掘り出し作業がすすめられている。

先づ爪先き上りになつた昔そのままの石畳を踏んで廃墟の中に這入る。二千年前の車ですり減された石の道はズツトつゞいていゝ。

陳列室にはいろ／＼な品々が並べられていて二千年前の当時の人々の生活が偲ばれてその文化の高いことに驚きと尊敬とを感じさせられる。

うら若い乙女の死の瞬間の姿――。

焼きたてのパンが器に盛られたそのままの姿で残っている。数々の彫刻品、見事な装身具又は生活用具など凡て立派な文化を物語つていゝ。

行く程に大理石の浴場、市場の跡、ヴェツテイ家の内部の壁画や中庭の様子に当時の豪華な生活がまざまざと偲ばれ、昔そのままの水道からは噴水が出ていて驚きを新たにさせられる。

一瞬の間に凡てが火山灰の下に七米も埋められたその惨鼻黙して語らず、今は観光の地として人々に訴えるものは何か？ 心は遠くギリシャ・ローマ時代の豪華な生活を偲び感興深いものがある。

丘を下つてナポリに引き返す。ベスピアスの麓は地味が肥えて、オリーブの林多く、その間に椰子の木も見かけ

る。日本の赤松のような松の木も、上の方がコンモリと美しく手入れされて立っているのが珍らしい。ナポリ湾の岸辺近いレストランで昼食をとる。ここは大変なお客で賑わつていて、バンドを連れた唄い手、カメオ売りなどがテーブルからテーブルへと廻つて来る。

食後再びバスで市内観光をする。高台のナポリ湾を見下す丘にのぼれば、南欧の風景が一望に開けナポリを見て死ねと云うセリフもさこそと思われた。このあたりは高級住宅が建ち並んでいる。

坂を下りて港に近いところに、かねてポンペイの町の壁の色だつたという丁度京都の紅がらに似た色で塗られた建物が有つて、水に映えた美しい風景は旅人の目を楽ませる。

今度は下町に行く。こゝの古い建物の向い同志が窓から窓へと洗濯物を一ぱいに干し渡して人々はそれをくぐつて歩いていゝようだ。又通りは花屋、果物屋、魚屋などの露店が並んでいて、古く汚れてゴチャ／＼していた。ガイドの小父さんは「家の中が暗く汚いので、日中は成るべく外にゐるのだ。しかし、ここに人間のほんとうの生活がある」と云つた。なかなか功いことを云うと感心する。

市内観光を終つて、少しの時間を惜しんでカプリ島まで足をのばす。ナポリの港を五時半に出る。快速艇に乗る、

振り返ればまさに没せんとする夕陽に映えたベスピアスを遠景に風景の素晴らしい美しさに見取れる。

艇は速度が速いためか動揺はげしく少し心地わるい。十分ですでに夕暮れのカプリ島につく。こゝも軽快な服装で、サングラスをかけた遊覧客で賑わつていゝ。バスで舗装された山道を登つてゆく。岩山の麓に家が建ち並んでいて、アナカプリとカプリの二つの部落があるとのこと。高い少し平なところは町並をして、商店、ホテルなどがあり賑わつていゝ。

島一番の景勝の地という伊豆の石廊崎に似た風景のところどころに暫らくバスを止めてここから引き返し、六時三十分発の船にあわて乗る、今度の船は大きく立派で客も多い。デッキからカプリの島を振り返れば家々の灯はまるで宝石をちりばめたようにかがやき、又となく美しい。

ナポリまで二時間かかる。

ホテルにかえり、夕食を終えて二、三の人々と屋上に出る。ナポリ湾をかこんだ町の夜景は又格別の眺めで、とおくベスピアスの登山電車の灯が空にさしたかんざしのように見え印象的だ。

明日はここを發つてローマに行くこととしていゝ。暫らく立つてナポリの最後の夜の美しい眺めに名残を惜む。

欧州記（国際女医会々議参加のため）前会誌につづく

偶

感

常任理事

山 口 三

重

日本女医会も戦後再発足してから今年で七年目となり、追々と組織機構も固められ、内容も充実して参り、全国に各支部が設けられ会員数も三千五百余名となり、増々発展の一途をたどりつつあります事は喜びにたえません。

殊に昨夏にはバーデンバーデンに於て開かれました国際女医会へ初の正式代表として二十名の女医を送り得ましたことは前号会誌にも詳しく報告がございましたが、この事によつて我が女医会も国際舞台に進出し、広く世界に存在を認められたわけであります。この上は会としてもますます／＼結末し、思いを広く世界に走せ、各国女医会と肩をならべて恥かしくない立派なものとして行き度いと思う。又、個々の会員にとつても遠く海外に出て見聞を広める機会が与えられたのであるから事情の許す限り、努めて語学を勉強し、国際会議に出席する様に心がけ度い、殊に喜ばしい事には昨夏の代表団には各同窓会よりの会員が、又老年中年若年の別を問わず入り交つて一団となり、よく国際場裡に処して来られた事である。日本女医会の姿もかくあり度いと思う。

この度、福田幹子先生等の御骨折により、いよ／＼日本女医史も出版の運びとなり御同慶の至りに存じますが、その編集者の言を借りれば、日本女医史は日本女性開放史でもあると云う。然り、歴史を播いて見れば、なる程とうなづける。私達の先輩諸女史が止むに止まれぬ好學心と女性開放の意氣に燃え、勇気をもつて困難を乗り越えてかち得たこの道である。戦前は男子の大学の医局に入つて勉

強させてもらうにもなか／＼の抵抗を感じたものであるが、戦後は幸いにも民主主義がとなえられ学制改革により、いかなる大学の門戸も男子、女子平等に開放され実力ある者は自由に学ぶ事の許される世となつた事は女子にとつては真にありがたい事である。現在の若い方にとつては、もはや、あたり前の事と思われようが、開拓時代の諸先輩方から見れば、誠に隔世の感がある。思えば日本女性が何と長い間の歴史の中で、しいたげられ乍ら、只つつましく、小さい自己の殻に閉じこもつて来た事である。いや、日本の国そのものが長い鎖国時代を経て、やつと明治維新にたどりついたのであるから無理もない事であるが、残念乍ら我々日本人、ことに女性には長い伝統的な所謂「島国根生」ともいうけちなものが残つていと思われ節がないでもない。今や世は宇宙時代である。人間ロケットが実際に空をとぶ時代である。目を広く世界に向けよう。目を高く宇宙の星空にあげよう。火星人や宇宙人に笑われない様につけよう。

一昨年の暮の常任理事会で、次回の総会は大坂で開催したら？との発案が出された時、私は大いに賛意を表した。相当、無理や困難はあつたが、それを押し通して、本部役員やことに大阪支部の方々の並々ならぬ協力が実つて昨年秋、それが実現し、盛んな総会が催され全国各地より、ことに西日本の会員の方々が日本女医会というものを再認識された事に於いて大いに益となつた事を信じている。

日本女医会もいわば乳幼児期を過ぎ、いよいよ身心ともに成長発達する充実期に入った。日本中に男女の医者は多い。だが女医だけがなせ別に集つて会をするのか、という質問を時にうける。私達は考えなければならぬ。医学という最高の教育を身につけ医術を行う特権をもち、女性として大らかな母性的な愛をもつて仁を行う事が出来るのである。開業、勤務の別なく個々の患者に接する時、誠心誠意患者の福祉を願い、それにより自己も又、幸を得るのである。今後は女医会としても何か女医会でなければ出来ない特徴ある仕事を（勿論、予算の裏付けがなければ出来ない話だが）例えば社会福祉を増進する事業等を計画実行出来る様になればすばらしいと思う。

以上思いつくまま駄文を書き連ねて、私の責を果し度いと思う。

日本女医史について

福田 幹子

女医史、女医史とよくも太鼓をたたきまし
たけれど、いよいよおそくとも八月一ぱいに
は皆様のお手元へお届けすることが出来るだ
ろうと思つています。

何事も成しとげるといふことは困難なもので
ありますが、これまで誰も手をつけていな
かつたものを、新しく生み出すということ
は並大抵のものでないことがわかりました。

ずいぶん骨を折りました、苦心もいたしま
した。しかしそれも、これも、みんな会員の
皆様がたの一方ならぬ御支援のおかげと思つ
て、ありがたく、うれしく思つています。屹
度皆様がたに満足していただけるものになる

と確信しております。

予約の方も思いの外の成績をあげておりま
す。この上のお願いは、会員の皆様は一人残
らず御買求めいただき、お一人にお一人づつ
他の人におすすみ願いたいもの（役員、支部
にはそれぞれ割当ててお願いしました）でご
ざいます。

素より日本女医史は日本女性の文化史であ
りますので、女医以外の人々にもおよみいた
だきたいでございます。

何分にもこの上とも一層の御支援をお願い
申し上げます。

(三六・五・二〇)

常任理事 三 神 美 和

昨秋は関西の福井副会長先生始め会員諸姉の御足
力により、第五回総会が盛大に催され、今も尚なつ
かしく、楽しかつた思い出として多くの皆様の中
中を去来することと思ひます。恒例のことではあり
ますが、本年は、東京で主催方をひき受け、昨年同
様に多数の会員のお集りを頂き、成果をあげたいと
希つております。特に本年は日本女医会役員改選期
に当り、総会当日、会長の決定を致さねばなりませ
んのので、万障御繰合せの上、奮つて御出席の程お願
い申し上げます。尚総会後左記の通り、総会当夜は日
頃の緊張をほどいて頂く様に演劇観賞にお誘ひし、
その翌日は知識をひろめるために心臓手術や病院見
学の予定をたてておりますので、こちらえも是非御
参加下さいます様お願い申し上げます。

(1) 第六回総会

時日 昭和卅六年十一月十二日(日)
午後二時—午後五時

場所 東京女子医科大学新講堂

(2) 懇親会

時日 十一月十二日 午後五時—十時
場所 東京歌舞伎座又は新橋演舞場

(3) 学術

時日 十一月十三日(月)

午前九時—午後三時の予定
場所 (a) 東京女子医科大学心臓研究所手術見学
(b) 東京築地 聖ルカ病院見学

尚詳細は総会間近にお知らせ申し上げます。

編集後記

やれ／＼これでホツとするせいはいつも後記
となると思知ほくなつて、われながらあきれ
る。が、しかし記事にも書けないようなことは
ここで書くより他あるまいと思つて。

実は今回の編集会席上(五月二十日)で、サ
ア困つたと悲鳴をあげたのは挿入写真が一枚も
用意してない事だつた。会員に関係のあるもの
となると今日昨日には間に合わない。編集子鳥
首思案の末、二十二日の前会長吉岡先生の御三
回忌のお写真を取らうという事に決定、早速に
当日のお写真を令孫美彌子様の御夫君佐々先生
におねだりしたという有様。今度など偶然のよ
うに困つた翌々日がこのような適切な巡り合せ
でよかつたようなものの、小さいながらも責任
を負わされた以上は些細なことにも終始心を配
つておかなければいけないと痛切に感じ、こ
れは会員の皆様にもお願いして記事と同事に写
真もお送り頂きたいのが希望。

終りに御協力頂いた佐々先生に厚く御礼を申
上げたい。

医薬品および化学薬品による中毒 新刊!

—中毒作用とその治療指針—

本書は英国化学会会員であり、また薬剤師協会会員でもあるピーター・クーバー氏の著書で、医薬品や種々の化学薬品に基因する諸種の薬物中毒の簡明な解説書である。医療関係者のみならず、医薬品や化学薬品、あるいはある種の動植物を取扱う人々にとって、その中毒の予防、発見、治療を行なう上に貴重な座右の書である。

ピーター・クーバー 著
和歌山医大教授 白川 充 訳
久留米工業大助教授 岡 国臣

〈本書の特長〉 医薬品や化学薬品の名称が見出しとしてアルファベット順に並べられており、それらの薬品名についても種々の同義語や呼称名をあげ、組成をも示してある／薬品の用途や所在を示し、中毒の起こる可能性や機会、場所などを詳しく示してある／薬品の作用については、人体に対する毒作用の観点から簡明に要約されており、中毒の実際例を挿入してあるので、具体的なよい参考になっている／救急処置や治療に際しては、本書をひもとけば随時どこでも行なえる方法が述べられてある／本書の大きさは新書判なので、常時携帯して救急処置に応ずることができる。

新書判 354頁 上製本／定価 800円 100円

食餌療法シリーズ

全 12 冊
B5変形判
上製美本

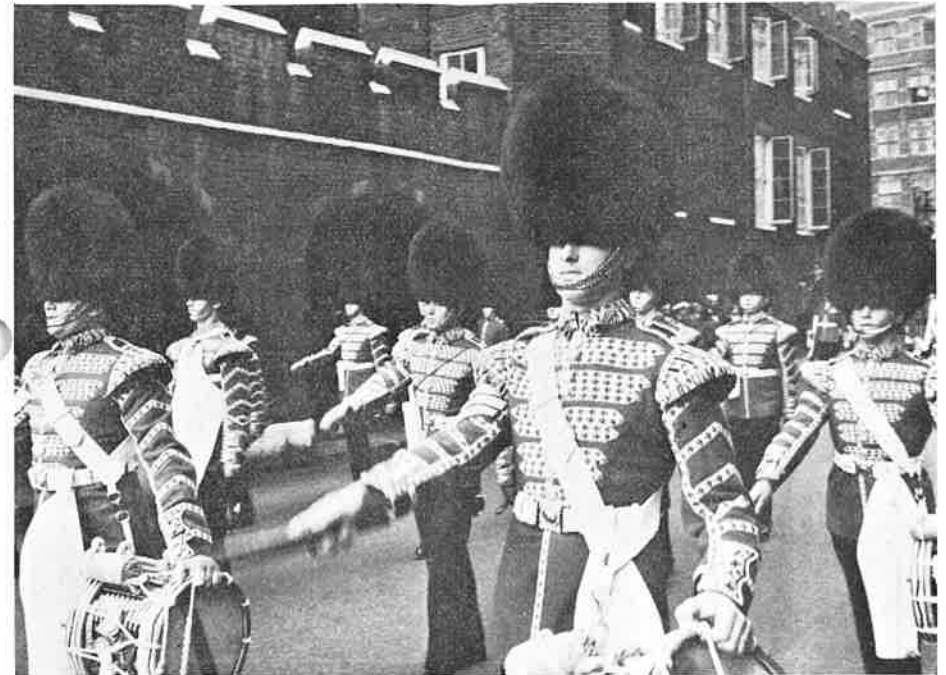
食餌療法を必要とする疾病を 12 の分野に分けて、最新の医学、臨床栄養学にもとづいて編集された一連の画期的な食餌療法の決定版!

多彩な執筆陣・一般家庭でもすぐ利用できる内容・豊富な四季の献立
・料理の作り方と写真・疾病の原因、本態、症状、治療についての解説

- ① 高血圧の食餌療法 ¥350
- ② 胃腸病の食餌療法 ¥350
- ③ 肺結核の食餌療法 ¥280
- ④ 妊産婦の食餌療法 ¥350
- ⑤ 糖尿病の食餌療法 ¥350
- ⑥ 腎臓病の食餌療法 ¥400
- ⑦ 肝臓病の食餌療法 ¥380
- ⑧ 手術前後の栄養法 ¥350
- ⑨ 肥満症・貧血・慢性便秘・下痢の食餌療法 ¥400
- ⑩ 乳幼児の食事 ¥400

(以下続刊) <シリーズ内容見本呈>

東京・文京・駒込片町・振替東京13816 医歯薬出版株式会社



バッキンガムの兵隊さん (ロンドン)

あなたの人生計画に海外旅行を!

海外の風物が、世界中の知識が
あなたのおいでを待っているのです。

業務内容

外貨・旅券・査証等手続一切
航空券・乗船券等の発売
ホテルの子約
積立旅行の取扱
海外旅行傷害保険の取扱
その他

海外旅行取扱営業所所在地および電話番号

本社(211)3211	丸ビル(201)3647	有楽町(201)2933
札幌(4)6201/4	仙台(2)3360	横浜(2)2269
名古屋(54)4691	京都(23)2305/6	京都駅前(37)8191
大阪(26)4922	三ノ宮(2)1670	岡山(2)3838
広島(6)0210	福岡(74)6360	長崎(2)7010

海外旅行のご相談は
日本交通公社へ

勞働大臣許可

美德看護婦紹介所

所長 杉本 はな

所在地 東京都新宿区若葉1丁目8番地

電話 四谷(351)1806・0355

業務案内

創業60年の看護婦会で先生方には
はじめからずっと御支援頂いてお
ります。なお今後一層のお引立を
お願い申し上げます。

「日本女医会誌」通刊第百二十六号
昭和三十六年六月三十日発行

定価二十円

発行人 日本女医会

編集人 福田 内

発行所 東京新宿区河田町一九
至誠会本部

印刷所 東京都中央区宝町二ノ七
秀峰美術印刷株式会社